

本と社会

「人文ネットワーク」ニューズレター
2005年6月1日 第10号

●発行元 人文ネットワーク
●印刷 (株)新栄堂 ●編集制作 (株)新評論編集部
●事務局 (株)新評論編集部内(担当:吉住)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-16-28
Tel.03-3202-7391 Fax.03-3202-5832
E-mail:yoshizumi@shinhyoron.co.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性のみに関心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニューズレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介します。

巻頭インタビュー

『現代の全体』をとらえる一番大きくて簡単な枠組』著者 須原一秀氏の人文書戦略

真理と正義の理論を超えて



一九四〇年生まれ。論理学・科学哲学専攻。社会思想研究者。龍谷大学・立命館大学講師。「超越的錯覚」(同)学歴的性における弱層矯正読本。

■ 現代大衆社会の暗さと閉塞感を突破する本、というのが今回のご著書の謳い文句となりましたが、まずこの本の出版意図についてお聞かせ下さい。

私は大して天の邪鬼でもないと思うのですが、誰も彼もあまりにも同じことを言えばそれはオカシイと感じてしまいます。

特に、知り合いの教授が新聞に載った記事を根拠に「高校生でもそう思っているのだから、やはり今の社会は答えのない閉塞状況なんだなあー」と感慨深げに言ったときには、これは放置できない問題だと思いました。

なぜなら、社会全般について解るはずもない高校生にそう思わせたのは大人達であり、特に教授などの知識人ですから、自分と同じことを言う口真似オウムに向かって「この鳥は解っている」と感心しつつ、自分たちの思い込みを強化しているように思えたからです。

そこで、この問題に関して私にできることは、「社会全般についての見取り図」を私なりに提示して、高校生をはじめ一般社会人が自分なりに「社会全般に対する見識」を身につけるための簡便なキットを提供することだと思ったのです。つまり、一般社会人が口真似オウムにならないための本を書きたかったのです。その上、知識人の中にも相当数の人が口真似オウムになっているような気がしますので、殊更にそう思ったのです。

■ 口真似オウムの知識人が陥っている状況とは？

多分それは、共産主義の破綻した資本主義社会の中で「倫理的共同体」の見取り図が描

けそうもないという事態と、そのために必要な「真理と正義の理論」がどこにも見つからないという事態だと思います。

しかも、ほとんどの知識人が「真理と正義の理論」の性質の悪さには気づいており、それにもかかわらず心の半分で、何処かに性質の良い「真理と正義の理論」を、そしてその根拠となる「真正の哲学」を求めていることが問題なのではないでしょうか。

その上に、ほとんどの哲学研究者も一般知識人も、「今や《死に体》の哲学は当てにならない」とも思っているのですから、事態は二重に振れています。哲学抜きで、つまり「真理と正義の理論」抜きで、本気で状況全体を見直すことが必要ではないでしょうか。そこにこそ突破口があると思います。

■ そうした議論の土俵に、様々な人をのせたいですね。

真剣に私はそう思っています。そのためには、意見の一致を図るのが難しい宗教・哲学・理想・大義・原則の一手手前に、全員が引き下がる必要があります。しかし、実際それは難しいし、ブッシュ政権をはじめ、現時点で誰も引き下がる様子がありません。

そこで私は、「真理と正義に関する学問的かつ哲学的理論はありえない」こと、故に「真理と正義に関して、誰も大言壮語をしてはいけない」ことを、万人が簡単に確認できる枠組が必要だと考えました。

そしてもう一つ、「自由主義・個人主義・人権主義の名を借りて、実際には一般大衆の野放図な欲望の解放が暴走している」というのが先進諸国の現実であり、政治的・経済的・風俗的に有徳の士の眉をひそめるようなことばかりですから、そのことを肯定的に取り込む枠組も必要ではないかと考えたのです。

以上二つの枠組が設定されれば、意見の違

う人々が同じテーブルについて議論できる準備が整うのではないのでしょうか。

■ 後者の枠組は本書の副題が示唆するものですが、こうした状況把握の先にはどんな議論が見えますか。

現代を閉塞状況と断定する人々は「現状は良くない」と見ており、にも拘らず「現状を良くするための展望が開けない」と思っているようです。したがって、「現状を良い」と見る状況認識から始めて、展望を開いてみるという試みは誰かが為すべきことです。

本書が正にそのルートを辿ったわけですが、結果はかなり明るいものになりましたし、「具体的な展望」も開かれたと思っています。

しかし、本当に現実的な展望が開かれたかどうかは読者が判断すべきことでしょうね。

■ 読み手にも、本書の大胆かつ周到な手法に埋め込まれた意図を嗅ぎ取るセンスが求められそうですね。

読み取りやすさに関して学生達と徹底的に相談した結果、本書の大半が「1段落=1文」の断定文集の形になってしまい、それを補うため注記に補足説明をかなり加えました。

また、「現代」を解釈するキットの説明に筆者の主張を混在させていますが、それは積木の使用法を説明するために、実際に「お船」を作ってみせるようなものです。そのあたりは読者の一部に誤解されそうですね。

(インタビュー:新評論編集部 '05.4.5)

『現代の全体』をとらえる一番大きくて簡単な枠組

——体は自覚なき肯定主義の時代に突入した！

須原一秀 著



現代日本が陥っているらしい「暗さ」と「閉塞感」はどこからくるのか。暗いシナリオしか描けない自称「良心的知識人」たちを一刀両断。著者は2500年の西洋哲学史を俯瞰しつつ殺伐たる現代大衆社会の「正体」を見極め、状況突破のために必要な最もシンプルな枠組を提示する。[2005年 新評論刊 四六上製 224頁 1890円(税込)]

2005年3月26日、人文ネットワーク第29回例会が『現代の全体』をとらえる一番大きくて簡単な枠組み』の著者須原一秀氏を招いて開かれた(早稲田大学人総研分室、14:00~18:00)。今回は、当会の桑田、土屋、生江、白石、出口、大野の他、5名の方のご参加をまじえた初の公開読書会となり、活発な討議が交わされた。(編集:大野)

■ 哲学は学問にはならない?

須原▶本書では、すべての立論の前提として、分析哲学者の立場から、リチャード・ローティなどとはやや異なった視点によって哲学の終焉が語られています。

まず、私は理論と学問とをわけて考えています。理論とは、数学や論理学において典型的に体験できるように、自動機械で動くゲームと同じで勝手にシステムが動き、そうとしかいようのない何かが見つかってくるような現象を指します。ピタゴラスは「神様は数学者だから、世界は数学が当てはまるのだ」といいましたが、現代に至るまで、このばかばかしい結論を誰も越えられない。プラトンからアインシュタインまで、みなピタゴラスに直接・具体的に影響を受け、ピタゴラスの路線で成功してきたといえます。

これに対して、学問は、圧倒的な整合性、安定性、生産性をもち、集団的実践のなかで

陶冶されたものを言います。それ以外いかなる意味でも「定義」はできません。進化論など、ちょっと見にはいい加減に見えますが、ダーウィン以来しぶとく生き延びてきています。その強さと、迫力、安定性が学問です。だから哲学はある意味では理論になるが、学問にはならない。たとえば、数学は自足語法で自らに対して責任がとれるが、哲学はその意味で説明責任が果たせない言説です。



座談会の模様

土屋▶フランス哲学では、言ってみれば責任語法をラングに比定し、無責任語法をパロールに比定します。そこでは、無責任語法に立つ実際の発話(パロール)を通してしか意味の関係は成立しません。ラングという言語システムが作り上げられながら、語られる行為で再組織化される。それを言わないと、虹のスペクトルの分け方が文化によって違うことは説明出来ません。須原さんの理論と学問の関係説明は単純すぎないでしょうか?

出口▶「数学や物理学は、何故かとはわからないがうまくいく。それは説明不可能だし、説明する必要がない」。こういう形で描いてゆく須原さんの全体像の作り方には疑問を感じます。私は人類学者ですが、人類学はあれもこれもとさまざまな知識をもってくるわけではなく、ある事例を調べることで全体性を立ち上げようとしています。須原さんの提示した学問論とは別の全体像の提示の仕方もあるのでは

ないでしょうか。

大野▶須原さんのおっしゃる通り本書は「1段落=1文」の「命題集」として構成されており、一つ一つの「命題」自体は興味深いのですが、それに対する証明がなされていません。数年前話題になったネグリ/ハートの『(帝国)』は書誌にある通り300あまりの学位論文クラスの論文を前提とし、それらをふまえた上で立論が展開されていましたが、学問とはそうした制度性に支えられて始めて進展していくものであり、それこそ学問のもつ迫力なのではないでしょうか? また、ご著書の結論は須原さんご本人が批判していたニーチェの素朴バージョンのようなナイーブで常識的な主張にとどまっているような気がします。

■ 乾いた意志に貫かれた思想・文体

桑田▶私はむしろ最終結論の「日本は自らの悲観的・消極的な傾向を克服し、民主主義を促進する方向で働きかけるべき」という主張は、現代必須の柔軟な思想の枠組みを提示しているように思います。大野さんの印象もわからないではないが、学位論文を書く姿勢と一般読者に読ませる姿勢とは違う。文体とは丸山眞男が言うように「痛切な気持ちをもって切り捨てる」経験によってつくられていきます。日本には、三島が『古今集』について語ったような、乾いた、知的な美の構築を求めるニヒリズム的な伝統がありますが、須原さんの思想や文体には、現代における思想のありようとして、たとえニーチェだろうと「有害なものは読むな」とあえて意志的に切り捨てることを恐れない、ある乾いた意志が認められます。現代日本における分析哲学の可能性の一つとして読ませていただきました。

存在論・行動・美

●桑田禮彰(駒澤大学教員/哲学)

本書は、日本における分析哲学の思想的展開として、稀有な作品であると思う。著者の知性は、分析哲学的批判性を少しも失わないまま、単純化・図式化を通して明快さを追求する文体に肉化されて、この現代大衆社会の現実の真っ只中を「いさぎよく」動き回っている。

分析哲学のウィトゲンシュタイン的秘儀が「存在論を捨てる」ことにはなく、存在論と行動を隔てる駈弁を捨て「存在論を生きること」にあるなら、本書ほどそれに忠実な作品は珍しい。言語的幻想を去って言語的闇としての存在論を言語的光としての行動に直結させること。それは闇と光の「混沌」ではなく、両者の「背中合わせ」である。

ちょうどラ・トゥールの絵のように、光と闇はきっぱり分かちつつ一体になると、特にこの日本では美的世界を開きがちである。その意味で本書は、たとえば三島由紀夫の言う日本的世界、一種の深い絶望に裏打ちされた古今集的な美的宇宙の近くにある。しかし著者の乾いた文体は、華麗を避け絶望を冷静さに転換することによって、美的宇宙を封じ行動の世界への通路を確保する。著者の言語哲学の本領は、この日本の風土に根づく美的言語世界との対決にあるように思える。

ネオリベリズムという否定主義の終焉

●白石嘉治(上智大学他、教員/文学)

ネオリベリズムが否定するのは生そのものである。市場の尺度にあわない営みは、無意味なものとして抹消されてしまう。ネオリベリズムは経済学的な認識論によって存在を切りつめる「理論」である。

だが、須原一秀氏によれば「理論」は終焉している。そのことを端的に示したのが、80年代に通産省が主導した「第五世代コンピュータ」である。そこでは日常言語の形式化が前提されていた。とりわけ、接続詞をたったひとつに還元することで、形式言語による世界の包摂が可能である、と。しかしこの試みは破綻する。われわれの生きる世界は接続詞を駆使した交渉にみちいたのである。

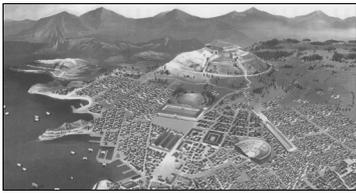
同じ80年代に、英国のサッチャー首相は「他の選択肢はない」と繰り返した。そして労働者との交渉を拒み続けた。ネオリベリズムを信奉していた彼女にとって、政治的な交渉の余地はない。数学にもとづく経済の「理論」からすれば、政治はそれ自体猥雑でしりぞけられるべきものだったのである。もちろん、人工知能を夢見た通産省がめざしていたのも、同様なネオリベリズムの統治にはかならない。したがって、今日、ネオリベリズムという「理論」の終焉において、まず肯定すべきものとして立ち現れているのは、われわれの生そのものであり、その生を賭した交渉としての政治なのである。

須原▶ニーチェでもカントでも、読んでみれば面白いところがあるんだと思いますが、絶対に読んだ苦労には見合わない。私以外誰もこんなこと、はっきりと言わないだろうという気があって、道化役を買ってでているわけです。

ニヒリズムについて言えば、私は一応ニヒリストではないつもりですし、共同体の中で幸運にも生きる意味を見いだす人もいますが、普通は人生一般の意味を全員に保証してくれるような世界はあり得ないし、そうなるべきでもないと思います。

民主主義が可能となる契機とは

白石▶須原さんは哲学を強引に理論に還元した上で、情報化・市場化したギリシャの中で哲学は民主主義に敵対するものとしてあった



古代ギリシャの植民地イオニア地方に栄えた「複雑な国際商業都市」の想像図 © 平岡正宗 2004

とおっしゃっているわけですね。そういう理論としての哲学はいらない、と。にもかかわらず、今日では、学問よりも理論の方が役に立ちそうだと優先されています。私は最近、ネオリベネオリベリズム（新自由主義）の問題に取り組んでいます。フリードマンをはじめ、ネオリベ思想

はすべてを肯定する肯定主義に見えますが、究極的にはAからBへ、BからCへという連鎖で、ただ移行するだけの自動的なプロセスしかない否定主義です。それは須原さんのいう「理論」にすぎません。理論の支配する世界では、過去にあったものが保存され、内在的に変化していくというプロセスがなく、交渉や政治が生じ得ない。フリードマンはマネタリストであり、すべてはお金で割りきれると考え、失業者は仕方がないと結論づけます。ところが、彼が退けたケインズは、経済学的な「理論」を壊す形で政治的介入を肯定します。須原さんは理論に対して学問、経済に対して政治を肯定することによって、民主主義を守ろうとなさっているように感じます。生江▶この本には、雑談の部分と本論の部分があって、哲学について書かれた雑談の部分のインパクトが強烈的なので、本論がみえにくくなっていますが、本論の部分をつなぎ合わせていくと、確かに、民主主義がどのような時に可能になるのかが論じられてますね。

土屋▶須原さんの考えと白石さんの考えとはすごく近いような気がします。要するに白石さんのネオリベ批判の背後には、ネグリのマルチチュードにあるように人間個人個人が自立した形で、世界を作っていくという考えがあるわけですね。一方須原さんは、今までの学問は超越的で絶対的なものとの関係で、一つの真理に向かって組織化するような形でつくられてきたが、共産主義的ないし宗教的

な原理主義を追求しようとする態度、あるいは絶対的な学問に邁進しようとするような態度は、いずれも現実の社会のなかでは大きな抑圧の装置になってしまう、とおっしゃっているわけですね。

生江▶猿雑な社会の中では、人々が直感的に正義と考えることは肯定される方向に進んでいく。正義を振りかざして声高に、性急に到達点を示そうとしても何ももたらさない。物欲しげな正義論、物欲しげな目的達成論、物欲しげな戦闘論は矮小であるし、いずれ失敗する。また、ネオリベのように「資本主義のなかでは利益達成が至上命題である、会社はそういうものだ」というのも、物欲しげな利益達成論であり、子どもの理論だ。物欲しげな勝利論、戦闘論は結局敵に似たものになる。浄土真宗のお文の一節にもそんな話がありましたが、須原さんの本の中には、そういう警告がくり返し語られているような気がします。最初に読んだときは、ある意味過激な議論でびっくりしましたが、「あとがき」に政治学の人に読んでもらいたいと書いてあって筆者の真意を納得しました。

座談会を終えて 論理的に整合しないものを、徹底的に排除する倫理的意志と、「哲学など資本主義社会の中に放り出したらなんぼのもんじゃ」という戦略的挑発のない交ぜになった著者の独特の語り口、出席者はしばしば翻弄され、また魅了された。いつの日か肯定の後にやってくるものを著者にお尋ねしたい。(大野)

理念の破壊

●土屋 進 (中央大学他、教員/現代思想)

ルカーチがニーチェを始めとした近代の思想家を総括した本のタイトルは『理性の破壊』であった。かつてそれを読んだとき、非合理主義の系譜の問題点が明白に思えたものだ。しかし今日目前に広がる状況は、全く違う印象を与える。非合理主義を批判する合理主義は、実は同じ根を持っていたのではないかと。両者に共通するのは超越的な存在である。「生」と「理性」の絶対的な超越。矮小なニーチェはアナボリック・ステロイド剤で自らを超人と化し、矮小なヘーゲルはコーヒーのおいしさに哲学的な理由を述べるかコーヒーはないものとする。愚者はただ思う。「馬鹿じゃない」。

『(現代の全体) …』の著者は近代哲学が生み出した絶対的理性の不成立を根拠として、複雑性と多様性が織りなす目前の世界像を、限定されたピタゴラス的科学理性に基づいて受け入れることを提案する。

しかし近代的科学理性に問題はないだろうか。人体は、「物質」でできている。しかし「人体標本」は人間ではない。人間であるということは、物質の間に関係が成立し、情報が流れているということだ。そしてその情報は人体なくして生み出されることはない。ここでは信仰と科学は同じ土俵にある。それらは「ないもの」を、言い換えれば「関係」を認定する手続きなのだから。問題は近代科学も多くの宗教と同じように、「排除と選別」を駆使して動きが生成する情報の場を追放することだ。「ローン」のような管理社会を支える科学信仰は、生成する未来の時間を可能性の場から既定の場へとすり替える詐術によって、運動と時間が生み出す生成情報の抹殺の上に成り立つのだ。

100語の世界はハードボイルドだ

●出口雅敏 (早稲田大学人間総合研究センター教員/文化人類学)

先日、本屋で『100語で英会話』という本を見つけた。この本の凄い点は言うまでもなく、一人人生きているならば遭遇すると予想できる日常生活の諸々の場面や会話を、100語に凝縮する、100語で表現する、その力技だ。力技だが、もちろん、学習者（とくに「英語弱者」）を意識した細やかな配慮や、教育経験に裏打ちされた確かな技術が背後にはあるのだろう。それはいい。危ういのは、それら学習上編み出された実践的方法や技術が、世界観や信念にすりかわるときだ。

100個の言葉だけで構成された言語世界の居心地とはどんなものか、想像してみよう。世界は100語で出来ている、という仮初の世界観が信念化されたこの世界では、その世界観の自己実現のため、日常生活を「100語で暮らす」惜しみない努力や、「100語の暮らし」を愛する美意識の維持に、絶えず忙殺され、強迫され続けるのではないだろうか。

100語の世界とはシンプルではあるが、それは「住む寂び」の美に喩えられるような幽玄な世界ではなく、意志的かつハードボイルドな世界であり、おそろしくタフな人間でなければ生きては行けない世界だ。方法や技術を、むやみに世界観や人生の指針にすりかえると、不必要に過酷な人生に追い込まれるだけだ。

解体すべきものは

●生江 明 (日本福祉大学教員/社会開発)

近代は、己の欲するものを最も的確に効率的に手に入れることを最善として突き進んできた。その目的を問うことよりも、狙ったものを無駄なく「如何にうまくやるか」を磨いてきた。

障害物、障害物などを排除すれば、ゴールへの軌跡は最短距離と時間で「美しい」直線を描く。直線の論理は無駄を好まず、邪魔な存在の排除を正当化する。管理は直線化する。

カンボジアでボルボト派が採用したのは、敵および敵性を持つものは殲滅せよ！という極めてシンプルな論理だった。スターリンもブッシュも同じ流れに属す。ネオリベリズムの論理もシンプルでわかりやすく、「美しい」。価値も意味もゴールも、称えられ高さを競うが、深みを増すことなく高みに上げられたまま、絶対的善として不可侵のものとなる。残るは、「如何にうまくやるか」だけである。

須原氏の議論は、これと正面から戦うのではない。しかし本書は、この「シンプルに美しく描かれた世界」の解体の書である。氏の肯定主義とは、純粹化の対極にある無駄や邪魔を肯定する。排除の無化である。真理へ向けて効率的に直進するのではなく、失敗やトラブルの度に復原する仕掛けをもって、わいせつがやがやという猿雑な健全さを肯定する氏の論理は、失敗をも最後まで共有する民主主義とヒューマンの輝きを放っている。

書評

須原一秀

本書の文体と内容の両方に共通する「異様な単純明快さ」に対して、大方の読者は快感と同時に危惧と反感を持つようです。それは『書標』（05.3月号）の福嶋聡氏の「身も蓋も無さが…真骨頂である」という文にも、人文ネットワークの桑田禮彰氏の「日本的なものを感じさせる明快さ」という言い回しにも、さらには土屋進氏、大野英士氏、生江明氏たちの質問や評言にも共通に顕われていたと思います。

たとえば、私は「哲学は学問にはならない」とあっさり主張しました。すると、当然「学問とは何か？」ということが問題となります。

そのためには、「哲学」と「数学」と「科学」の全歴史を踏まえると同時に、「現代数学」と「現代物理学」の最先端の業績を押さえて答える必要があります。しかし、それは「科学哲学」という分野の2度の——1度目はネーゲル流の、2度目はクーン流の——破産を経験した私としては、不可能とまでは言わないにしても、現時点ではほとんど誰にも期待できない作業だと考えます。そこで、その作業をスキップします。

普通「学問的」という言葉は、①自然科学的文脈、②人文科学的文脈、③学術的文脈で使われる可能性があります。ところが、科学者にも普通人にも、②と③の間は限りなく近いのに対して、①と②の差はあまりにも広大なので、①に限定しないと「学問的」という語の用法は安定しないと考えられます。つまり、身も蓋も無い科学主義的学問観です。

これは学術趣味を持たない普通人の普通の感覚に合うだけではなく、科学のもつ圧倒的迫力は誰にも解り易いので、政治的文脈では、意見の一致を図るための共通前提になりやすいという長所を持っています。

と言うのも、「真理と正義」の名のもとに悲惨な歴史を刻んだ20世紀を経験した我々は、「真理と正義の理論」を名のるものに対して、①の意味での学問性を要求することはこの際正当だと考えるからです。

そうすれば、普通人の普通の感覚で「真理」と「正義」に関して誰も大言壮語をしてはいけないことが簡単に納得できる上に、現代の政治と社会の改革はそのような納得から出発すべきだという本書の主張が提示しやすくなります。「この点に関しては複雑な議論は一切必要ない」という確信が本書の「異様な単純明快さ」の背景になっているとしたら、この際許されるのではないのでしょうか。

また、私は授業中に原稿の一部を受講生に読ませたりして色々調査をした結果、根拠付けと接続詞を最小にした文が最近の学生には受け入れやすいという印象を持ちました。その結果が本書の「1段落=1文」の文体ですが、それも本書を気持ち悪いほど単純にしているはずだ。（すはら・かずひで）

書店からの声

● Junk 堂書店池袋本店 副店長 福嶋 聡

亡くなった心理学者の頼藤和寛氏もそうだったが、須原一秀氏の著書の魅力は、その「身も蓋も無い」ところにある。「読む者を元気にさせてくれる逆説的な諦念」とでも言おうか。それは、まさにある種の「超越錯覚」だろう。茂木健一氏や前野隆志氏の脳科学の本を読むと、そもそも「意識」を成立させているのは「超越錯覚」のようであるし、書物という物質（ぼくらにとっては商材）を介した読者と著者の出会いが二重の「超越」を経るしかないのだから、それが「錯覚」であることには何の問題もない。大切なのは読者を「元気にしてくれる」かどうかなのであり、読後暗澹たる気分を陥らせてくれた山田昌弘氏の『希望格差社会』（筑摩書房）と対置する文脈でこの本を紹介し続けているのも、それゆえである。

「猥雑と悪趣味と犯罪が多少はびこる社会においてしか、『民主主義』は機能しない」と言い切り、「栄華も悲惨も名誉も没落も経験しうる前進基地に投げ出されている現代人の状況」を、「元気のある人にはワクワクするような状況」と呼ぶ須原氏の姿勢には、心から共感する。

ただ、「哲学よ、お前はもう死んでいる」とかっことよく言い切ってしまう須原氏の「戦略」には留保を表明しておきたい。そこには、「無理を承知で」言葉を紡ぎ出し他者と連帯しようとする哲学徒たちの愚直な営為に繋がっていけないリスクを感じ取ってしまうからだ。

（ふくしま あきら）



本書を店頭で手にする福嶋聡氏

Junk 堂書店池袋本店
10階層の日本最大の書店。背の高い図書棚が並び、圧倒的な在庫点数を誇る。ゆつり本を選んでもらえる「座り読書の用の椅子・机」を配し、4階喫茶で毎木・土曜日に開催している「トークセッション」も好評。

福嶋 聡氏が選ぶ 現代の閉塞状況を突破するための本

- **思想なんていない生活**（勢谷浩爾 '04 ちくま新書 861円）居並ぶ「現代思想」の旗手たちをメッタ斬りにする痛快な本。対象と方法は須原氏とは異なるが、「ふつうの人間の生き方を擁護する」というモチーフは、共通している。
- **人間的自由の条件**（竹田青嗣 '05 講談社 2835円）ヘーゲルを丁寧に読み解きながら、ポストモダンのアイロニズムに徹底して抗い、近代の（原理）としての「自由」の可能性を追求する。漸進的な「民主主義」を擁護する点は、須原氏と通底する。
- **自由の平等**（立岩真也 '04 岩波書店 3255円）働ける人が働き、必要な人がとる。「自由の平等な分派」を追求したとき、オルタナティブな世界の姿が見えてくる。粘着質の文体は、その粘り強い思考に共振したとき、むしろハマる。
- **現実の向こう**（大澤真幸 '05 春秋社 1890円）北朝鮮問題やオウム信者への具体的な提言には、ハッとさせられる。気鋭の社会学者が、現代の閉塞状況を徹底的に見据え、その突破口を探る。

状況雑感

「愛国無罪」という論理の陥穽

● 蔵持不三也（早稲田大学教員／歴史人類学）

文化大革命で「造反有理」の言葉が吹き荒れた中国で、いま「愛国無罪」という言葉が踊っている。国を愛する行為なら、多少のことは大目に見る。意味はそのあたりにあるようだが、そのこと自体とやかくいうつもりはない。言葉の背景にある国内的事情もあえて触れない。だが、いささか気になるのは、この言葉のもつ論理的な陥穽を彼らがどこまで認識しているのか、という点である。つまり、批判の対象のひとつとして正当に取りあげられている、悪名高い日本の右翼的教科書の論理が、皮肉にもまさにこの「愛国無罪」を歴史の作法として唱えているからだ。今日の価値判断ではなく、当時の状況から歴史を考える。たとえそれがどれほど非人道的な行為・行動であっても、時代的なコンテクストと当該者たちの国を思う心情からすれば、正当化されてしかるべきではないか…。自虐的歴史観の払拭を謳い文句とする「新しい歴史教科書」のスタンスはここにこそある。もとより中国人民のもって社稷の民たるうとする気構えに敬意は払うが、批判する側の論理がされる者のそれに絡めとられてしまう。その危険性だけはどうしても避けなければならない。ナショナリズム抜きのパトリオティズムが切に求められる所以である。

編集後記▶ 待望の“実学人文書”が誕生した。外見は極シンプルだが、巨視的フレームと精密な論理を内蔵したその作りは、読み手の感覚にダイレクトに介入することで、各読者の立ち位置を嫌でも炙り出す仕掛となっている。しかも、自分の立ち位置が「真つ当」かどうか、読者は自ずとその咀嚼を迫られる。まさに「論理屋、須原一秀」の職人芸、である▶ 今回読書会で取り上げた『現代の全体』をとらえる一番大きくて簡単な枠組の仕上りを一言すれば斯くの如くで、須原氏は自らの職業的使命（分析哲学）と学生たちとの徹底的な対話をベースに本書を完成させた。「現代哲学などどこにも存在しない」「民主主義は清潔でなくてよい」といった著者の「挑発」を封ずるも解放するも、読者は結局、直ちに自らの現実感覚の所在を試されることになる▶ 殺伐たる今日状況を突破するために、まずは本書を二読三読し、具体的な日常現場で人間世界への眼差しを磨き澄ませよう。単なる「読書議論」を越えるために▶ 当読書会には本書寄稿者、福嶋聡氏はじめ5人の方々が飛入りでご参加下さった。ゲストとして大津よりはるばるお越し頂いた須原氏と共に心より感謝『現代の全体』をとらえる一番大きくて簡単な枠組 編集者